

説明：

ソフィーはイスラームについて間違っただ知識を吹きこまれながらも、自らその真偽を明らかにする決心をします。

よりソフィー ジェンキンス

掲載日時 28 Jan 2013 - 編集日時 28 Jan 2013

カテゴリ：[記事](#) > [新改宗者ムスリムの逸話](#) > [女性](#)

私は英国の下位中産階級の家庭に生まれました。当時、私の母は主婦（現在もそうです）で、父は電気会社で働いていました（現在は電子工学の講師を勤めています）。父はカトリック、そして母はプロテスタントの出身です。二人とも1970年代初頭のクエーカー教会に一時影響を受けましたが、二人が出会う頃になると、どちらも強固な無神論者となっており、我が家では宗教が実践されるどころか、決してそれに触れられることすらありませんでした。両親は、私が成長して宗教を持つことに決めるのなら、それに異を唱えることはないと言っていました。

私は信仰について教えられてきた訳ではありませんでしたが、幼少の頃から神を信じていました。クリスチャンスクールで教えられてきたことについても、それが正しくないことになんとか気付いていました。私はイエスの神性や聖霊などを信じず、それらはすべて虚偽に見えましたが、学校ではそれこそが真実であり、他のすべての宗教は間違っていると教え込まれていたため、とても混乱していました。小さな子供は大人の言うことはすべて正しいのだと信じるものですが、私は「間違っただこと」を信じていることに対して罪悪感を感じたため、唯一神への信仰を自分の中だけにしまっておくことにしました。私はそのことについて恥じ入り、やがて自分が異端者でなくなることを祈りました。若い頃は、「イスラーム原理主義」への恐怖心に晒されていて、特にサルマーン ルシュディ事件のこともあり、人々の脳裏にはムスリムへの恐怖がいつもよぎっていたと思います。私の通っていた小学校には、二人のムスリムの少年がいましたが、彼らのうちの一人アリーが合同礼拝を拒否していたこと以外は、二人とも信仰を隠していました。

私はいつも、正しき道を示してくれるよう、神に祈り、神の助けを

乞い続けていました。11～12歳の頃になると、神の存在は疑う余地がなくなっており、高校生にもなると、私の抱いていた神への信仰は間違っただものではなかったと確信し始めました。この頃、私はイスラームについて全く知らず、唯一「知っていた」ことといえば、女性をゴミのように扱う暴力的な宗教ということだけでした。私が学校で教えられていたのは、イスラームが剣によって広められたもの（つまり、暴力と強制による布教がされていたということ）で、イスラームの女性は衣服によって象徴される私有物で、ムスリムたちはムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）を崇拝しているということでした。私はそれに非常に嫌悪感を抱き、マンチェスターで買い物をしていたときにムスリムを見かけたときは（私の地域にはそれなりにムスリムがいます）、「どうしてそんなことを出来るのか？」と思っていました。私は本当に憤慨していたのです。しかし、私がイスラームについて学校で教わった唯一の正しいことは、ムスリムが唯一神を信じていることであり、それは私がそれ以前には全然知らなかったことでした。

私はユダヤ教、ヒンズー教、仏教などの慣習についても調べてみましたが、それらはすべて人工的で矛盾に満ちたものを感じられました。しかしある日、何が私にそうさせたのかは分かりませんが、私がこれまでに学んできたことが正しかったのかどうかを確認したくなりました。私はムスリムが唯一神を信じるということを聞いてはいましたが、それが正しいのか確認しようと思いました。近所の図書館で「Elements of Islam (イスラームの要素)」という本をこっそり借り、ムスリム女性の項目を真っ先に開くと、そこで発見したことに驚愕しました。それは、私がイスラームと女性について教えられてきたことと正反対のことが書かれており、その内容といえ、私がこれまでに聞いたことの何よりも素晴らしいものでした。私はそれが真実であると直感的に分かったため、それを疑いもしませんでしたし、私の祈りが答えられたのだと分かりました。イスラームこそが、私が今までずっと探し求めてきたものだったのです。しかしこのように感じることに對して、小学生時代から教え込まれてきた記憶が蘇り、罪悪感を感じ出しました。なぜこのような「間違っただ」宗教を信じることなど出来るのか、というものです。私はイスラームが真実ではないという証拠を探しましたが、それは不可能でした。イスラームに對して否定的なことが書かれてある本は、すべて嘘だということが分かったのです。そしてイスラームに對して肯定的なことが書かれてある本は、すべて真実を語っていました。

私は自分がムスリムになるべきだと決意したものの、それを受け入れることが出来ず、そのことを誰にも告げませんでした。私は入手可能な全ての本を読み、図書館からクルアーンの英訳も借りましたが、それは中世の英語だったため理解出来ずにいました。そのことが私を挫けさせなかったのは、それはただの翻訳本であり、理解できた部分はとても気に入ったからです。私はイスラームが一生かけて取得するものであること、そして一旦足を踏み入れれば後戻りは出来ないことを知っていたので、完全に確信を得る必要がありました。結局、私は1997年の1月に、とあるチャットルームに偶然入り、私の人生を変える出来事が起こるまでの2年半、独学を続けました。その(ムスリムが運営する)チャットルームでは色々な助けを借り、2度目に入ったとき、世界中の人々が立ち会う中、シャハーダ(イスラーム信仰を受け入れる時に行う信仰宣言)を行ったのです。

この記事のウェブアドレス：

<http://www.islamreligion.com/jp/articles/123>

Copyright © 2006-2012 www.IslamReligion.com. All rights reserved.